

# 大学生の親子関係・自尊感情・生き方志向と 子ども時代の両親の養育態度との関連

——過保護という養育態度の検討——

山下美実子・石 暁玲・桂田恵美子

## I. 問 題

現代の若者は、ニートやフリーターが多く問題になっている。それは自分自身が何をしたいかがわからず、人生に対して積極的に目標や夢を持つことが少なくなっていることを表していると思われる。そのような子どもに対して、親の方も甘やかし、いつまで経っても保護してしまう傾向があり、子どももそれに甘えるという悪循環が考えられる。そうしたことから、若者が人生を積極的に生きるには、親の育て方が大いに影響を及ぼしていると考えられる。特に、ニートやフリーターの問題を考えると、過保護という子どもを過剰に保護する親の養育態度が若者の生き方に対する志向にどのような影響を与えているかを検討する必要がある。

養育態度とは、親が子どもを育てるにあたって、意図的あるいは無意図的にとる一般的な態度・行動（原田，2008）と定義されている。養育態度でも、特に母親の養育態度が、子どもの発達に大いに影響を与えることは、これまでも多く研究で取り上げられている。その影響は、実に広範囲に及んでいるが、子どものスキルや行動などが頻繁に取り上げられている。例えば、小林（1997）は、母親のしつけスタイルが子どもの社会的行動とどのような関係があるのかを検討する研究を行っている。その研究結果によれば、全体として受容的自律のしつけを受けている子どもたちの中でも、テレビの視聴に関してだけは受容的ではなく厳しいしつけを受けてきた子どもの方が、保育園における社会的行動の面ではより適応的であった。この研究では、母親の養育態度の具体的な場面を取り上げているため、子どもにより影響を与えるしつけを具体的に検討することができている。この小林（1997）の研究から、単に受容的なしつけをするだけでなく、厳しくしつける部分との区別も必要であると考えられる。また戸田（2006）は、母親の養育態度と、幼児の自己制御機能及び社会的行動とがどのように関係するかという研究を行っている。その研究結果では、幼児の自己制御機能の中でも仲間との関係の中で「やめて」と言えたり、進んで手を挙げて発表するといった自己主張や思いやり行動を育てる際には、過保護や甘やかしといった養育態度がマイナスの影響を及ぼすことが示されている。また、肥後橋（2005）は、母親の養

育態度が子どもの学校におけるスキルと家庭におけるスキルにどのような影響を及ぼすかを検討している。その研究結果では、男女ともに母親の養育態度の情緒的支持が強いほど、学校での思いやりのスキルや家庭での配慮のスキルなどを多く獲得していることが示されている。また、女子の場合のみ、母親の養育態度の統制が強い傾向があるほど、自己中心的行動を高め、さらに思いやりのスキルをも高めることが示されている。この相反するスキルに同じ養育態度が影響する原因は明らかにはされていないが、子どもが統制等の養育態度をどのように認識するかにより、影響の仕方が変わってくると考えられる。

このように親の養育態度は、子どもの社会的発達に影響を及ぼすことが示されているが、こうした社会性を身につけることは適応的に生きる上で不可欠だと考えられる。その生きる上での生き方志向についても、親の養育態度が影響を及ぼすことが研究されている。千葉・我部山・菅・金岡（2008）は、親の養育態度に対する子どもの認知と、生き方志向との関連を検討している。この研究によると、親の養育態度では、父母ともに受容・放任などの甘やかし型が多く、特に父親の甘やかし型が子どもの生き方への影響が大きいことが示唆された。また千葉ら（2008）は、子が親から放任されつつも受容されていると感じられると、他者を尊重しつつ自己の成長や目標達成のために、柔軟かつ積極的に努力する生き方志向になるとしている。また高井（1999）は、生き方の態度において、ありのままの自己を生きようとする姿勢や他者受容的な姿勢を持っている者は、自己を受容できており、自尊感情も高く、自己の存在価値を自覚できている傾向があることを示している。このことから、積極的な生き方志向と自尊感情との間にも関連があると思われる。

自尊感情とは、遠藤・井上・蘭（1992）によると、一般に「人が自分の自己概念と関連づける個人的価値及び能力の感覚」と定義づけられており、人が持っている自己受容などを含め、自分自身への感じ方をさしている。遠藤ら（1992）によると、自尊感情に関しては、成長期における両親の態度と行動とに焦点を向けるべきことを Rosenberg が示している。柴山・新井（2004）は、Rosenberg の自尊感情尺度を用いて、大学生を対象に自尊心

と16歳までの両親の養育態度への認識内容との関連を検討している。その結果、女子は父親・母親のどちらにおいても自主・独立を強く促されたと感じている者ほど、高い自尊心を持つことが示されている。一方で男子では、母親においてのみ、自主・独立を強く促されたと感じている者ほど高い自尊心をもつことが示された。この結果から柴山らは、やはり幼い頃から心理的自立を促され、行動の自由を与えられるなど、親から一人人として認められる経験をするのが自己を価値ある者として受け入れることに結びつくと述べている。

以上の先行研究より、特に過保護や甘やかしという親の養育態度が子どもに影響を及ぼすことが示されていた(例、戸田、2006、千葉ら、2008)。しかし、子どもの社会的スキルや行動に比べ、生き方などの価値観に影響するという研究が少なかった。そこで本研究では、大学生を対象に、子ども時代の両親の養育態度が自尊感情、生き方志向にどのように関連するかを検討することを主目的とする。また子ども時代の親の養育態度が現在の親子関係とはどのように関連しているかも検討する。そして自尊感情と生き方志向の関連の検討も目的に含む。子ども時代の養育態度は、父親・母親の両方の養育態度を測定することにより、父親と母親への認知の違いによる影響も検討し、特に過保護という養育態度に焦点をあてて検討していく。目的に沿って、以下の仮説を立てた。

- ① 子ども時代の両親の養育態度において、愛情は多く感じ、過保護だとは感じていない大学生は、現在の親子関係もいい状態にあり、自尊感情が高く、ポジティブな生き方ができている。
- ② 高い自尊感情を持っている大学生は、ポジティブな生き方ができている。

## II. 方法

### 1. 対象者

関西の大学に通う学生306名(男性:112, 女性:194)を対象とした。平均年齢は20.68歳(範囲18~27歳)であった。

### 2. 手続き

授業中に質問用紙を配布し、回答してもらった。調査時期は、2009年10月から11月であった。

### 3. 測定尺度

#### (1) 過去の養育態度

自分が受けた養育態度を測定する尺度として、Parkerら(1979)が作成したParental Bonding Instrument(PBI)の日本版(小川、1991)を使用した。これは、親の行動・態度から親との絆を評価するものである。“暖かく、親しみのある声で話しかけてくれた”等の

「愛情・共感」13項目、“私が好んでしたいと思うことをさせてくれた(逆転項目)”等の「過保護・過干渉・統制」12項目の全25項目からなり、子ども時代(16歳まで)の母親・父親それぞれの行動や態度に対して「非常にそうだ」(4点)から「まったく違う」(1点)の4件法で回答を求めた。愛情得点は13-52点までで高いほどよく、過保護得点は12-48点までで低いほどよいとされる。また鈴木ら(2002)は、この尺度を使用し、愛情得点が中央値より高ければ「保護的」、低ければ「無関心、冷淡」とし、過保護得点が中央値より高ければ「過保護」、低ければ「自律の認証」とし、愛情軸と過保護軸の2つの次元で4タイプに分類している。本研究はこの分類法を使用した。この尺度の本研究での信頼性係数( $\alpha$ 係数)は、母親は.66、父親は.70であり、合計では.81であった。

#### (2) 現在の親子関係

Takahashi(1990)、Takahashi & Sakamoto(2000)により作成された、Affective Relationships Scale(ARS)を使用した。本来この尺度は、愛情の要求を向ける対象となりうる、母親・父親・恋人・友人・尊敬する人物にそれぞれ12項目ずつを4件法で測定する尺度である。しかし本研究では、母親・父親のみを対象に回答を得た。“(母・父)が困っている時には助けてあげたい”(母・父)が私の心の支えであってほしい”等に対して「そう思う」(4点)から「思わない」(1点)の4件法で母親・父親それぞれを単純加算し、点数の高い方が良い親子関係であることを示す。12項目には、6種類の心理的機能(1. 近接を求める, 2. 情緒的支えを求める, 3. 行動や存在の保証を求める, 4. 激励や援助を求める, 5. 情報や経験を共有する, 6. 養護する)が各2項目ずつ組み込まれている。本研究での信頼性係数( $\alpha$ 係数)は母親と父親それぞれでは.91で、合計では.95であり、高い値が得られた。

#### (3) 自尊感情

Rosenberg(1965)が作成し山本ら(1982)が邦訳した、自己への感情的評価の測定尺度である自尊感情尺度(Self-Esteem Scale)を使用した。“少なくとも人並みには、価値のある人間である”等の10項目からなり、「あてはまらない」(1点)から「あてはまる」(5点)の5件法であった。得点が高いほど自尊感情が高いことを示す。本研究での信頼性係数( $\alpha$ 係数)は.85であった。

#### (4) 生き方志向

板津(1992)が作成した生き方尺度を用いた。人の生き方や生き様、いわば社会や他者との関わり合いの中で生きていく人間の主体的創造的な生活態度を測定する尺度であり、個人の自己や社会に対する価値観を測定している。28項目に対して、「いつもあてはまる」(5点)か

ら「全くあてはまらない」(1点)までの5件法であった。各下位尺度に属する項目への回答値を合計して尺度得点を算出する。得点が高いほど生活態度が主体的であることを示す。下位尺度は、1. 能動的実践態度(“努力をおしまずに、自分の出来ることに向かって完全燃焼する”等)、2. 自己の創造・開発(“自分の持っている潜在的可能性を追求し続ける”等)、3. 自他共存(“他者との関わりを大事にする”等)、4. こだわりのなさ・執着心のなさ(“過去の失敗をくよくよ後悔しない”等)、5. 他者尊重(“他人と争うようなことはしたくない”等)である。本研究での28項目全体の信頼性係数( $\alpha$ 係数)は.85であった。下位尺度ごとでは、能動的実践態度は.79、自己の創造・開発は.78、自他共存は.62、こだわりのなさ・執着心のなさ.34、他者尊重は.28であった。こだわりのなさ・執着心のなさと他者尊重については、信頼性係数が極度に低かったため、分析から除いた。

III. 結果

1. PBI タイプの分類

両親の養育態度の測定に使用したPBI得点に関しては、鈴木ら(2002)に従い、愛情得点・過保護得点の母

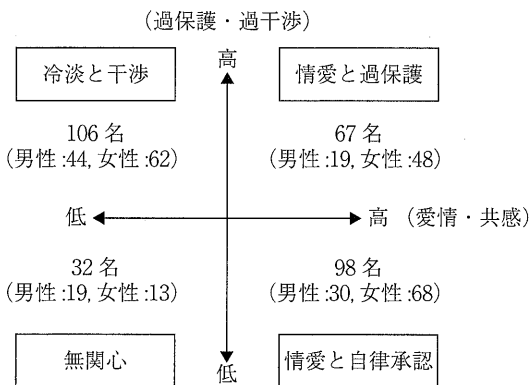


Fig. 1 母親の養育態度のタイプ分類 (n=303)

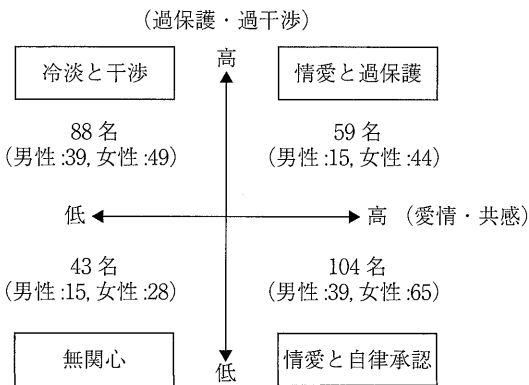


Fig. 2 父親の養育態度のタイプ分類 (n=294)

親・父親それぞれの中央値を基準に2群に分け、その組み合わせから、「情愛と過保護」、「情愛と自律承認」、「冷淡と干渉」、「無関心」に分類した。それぞれのタイプ別分布を Fig. 1 と Fig. 2 に示した。

2. PBI タイプと現在の親子関係の関連

まず、現在の親子関係を示すARS得点における性差をみるために、t検定を行ったところ、父母どちらにも有意差がみられた(Table 1参照)。女性の方が男性より、どちらにおいても親子関係のARS得点が高かった。性差がみられたため、PBIとの関連に関する分析は男女別におこなった。

母親との現在の親子関係と養育態度の関連を検証するためPBIタイプ4種類を独立変数、母親とのARS得点を従属変数として一元配置分散分析を行った結果、男女共にPBIタイプの効果が有意であった(Table 2参照)。父親とのARS得点においても同様の分析を行った結果、男女共にPBIタイプの効果は有意であった(Table 3参照)。養育態度の2軸でみると、両親とも、また、男女ともに愛情軸の違いによる差であった。その差は特に女性において顕著であった。

3. PBI タイプと自尊感情の関連

自尊感情においては有意な男女差がみられなかった( $t=.70, df=304, n.s.$ )ので、両親の養育態度との関連についての分析は、男女分けずに行った。PBIタイプ4種類を独立変数、自尊感情得点を従属変数とする一元配置分散分析を行った結果、両親どちらのPBIタイプの効果も有意であった(Table 4, Table 5参照)。LDSによる多重比較の結果、母親は「情愛と自律承認」と「冷淡と干渉」の間に差がみられ、父親では「冷淡と干渉」と他3タイプの間に差がみられた。養育態度の2軸でみると、両親共に、愛情軸、過保護軸どちらも自尊感情に関連していた。

4. PBI タイプと生き方志向の関連

生き方志向得点においても有意な男女差が見られなかった( $t=.10, df=304, n.s.$ )ので、PBIとの関連の分析は、男女分けずに行った。PBIタイプを独立変数、生き方得点と下位尺度3種類を従属変数として一元配置分散分析とLDSによる多重比較を行った結果、両親どちら

	全体 M(SD) n	男性 M(SD) n	女性 M(SD) n	t 値
母親	33.16(7.54) n=306	30.21(6.30) n=112	34.86(7.68) n=194	5.73***
父親	31.38(7.48) n=295	29.54(6.64) n=108	32.44(7.75) n=187	3.40**

\*\*p<.01 \*\*\*p<.001

**Table 2** 母親の養育態度タイプ別にみた母親とのARS得点

		情愛と過保護 M(SD)	情愛と自律承認 M(SD)	冷淡と干渉 M(SD)	無関心 M(SD)	F 値
ARS 得点	男性	33.89 <sup>a</sup> (6.18)	31.63 <sup>a</sup> (4.46)	28.20 <sup>b</sup> (6.86)	28.95 <sup>b</sup> (5.69)	4.89**
	女性	37.08 <sup>a</sup> (6.29)	38.01 <sup>a</sup> (6.82)	30.79 <sup>b</sup> (7.34)	30.69 <sup>b</sup> (7.72)	15.05***

注：a-b の差は LDS により 5% 水準で有意差が認められたものを表している。  
\*\*p<.01 \*\*\*p<.001

**Table 3** 父親の養育態度タイプ別にみた父親とのARS得点

		情愛と過保護 M(SD)	情愛と自律承認 M(SD)	冷淡と干渉 M(SD)	無関心 M(SD)	F 値
ARS 得点	男性	33.27 <sup>a</sup> (6.07)	31.55 <sup>a</sup> (5.28)	27.73 <sup>b</sup> (7.05)	26.13 <sup>b</sup> (6.30)	5.68**
	女性	35.70 <sup>a</sup> (5.85)	35.83 <sup>a</sup> (6.79)	27.88 <sup>b</sup> (6.43)	27.54 <sup>b</sup> (8.41)	21.02***

注：a-b の差は LDS により 5% 水準で有意差が認められたものを表している。  
\*\*p<.01 \*\*\*p<.001

**Table 4** 母親の養育態度タイプ別にみた自尊感情得点の平均値の比較

	情愛と過保護	情愛と自律承認	冷淡と干渉	無関心	F 値
自尊感情得点	30.96(6.30)	33.06 <sup>a</sup> (7.06)	28.87 <sup>b</sup> (7.27)	30.59(7.54)	6.063**

注：a-b の差は LDS により 5% 水準で有意差が認められたものを表している。( ) は標準偏差を表す。  
\*\*p<.01

**Table 5** 父親の養育態度タイプ別にみた自尊感情得点の平均値の比較

	情愛と過保護	情愛と自律承認	冷淡と干渉	無関心	F 値
自尊感情得点	31.88 <sup>a</sup> (6.35)	32.53 <sup>a</sup> (6.70)	27.75 <sup>b</sup> (6.75)	31.86 <sup>a</sup> (8.03)	8.834***

注：a-b の差は LDS により 5% 水準で有意差が認められたものを表している。( ) は標準偏差を表す。  
\*\*\*p<.001

**Table 6** 母親の養育態度タイプ別生き方得点とその下位尺度の平均値の比較

	情愛と過保護	情愛と自律承認	冷淡と干渉	無関心	F 値
生き方得点	95.72 <sup>b</sup> (11.96)	102.46 <sup>a</sup> (12.55)	93.96 <sup>b</sup> (14.02)	98.50 (10.77)	8.10***
能動的実践的態度	24.55 (4.41)	25.85 <sup>a</sup> (4.86)	23.60 <sup>b</sup> (4.78)	24.72 (4.55)	3.88*
自己の創造・開発	22.64 <sup>b</sup> (4.68)	24.97 <sup>a</sup> (4.81)	23.02 <sup>b</sup> (5.55)	23.69 (3.76)	3.81*
自他共存	19.15 <sup>a,c</sup> (2.91)	20.57 <sup>a</sup> (2.50)	18.26 <sup>b</sup> (3.01)	19.78 <sup>a</sup> (2.89)	11.72***

注：a-b, b-c の差は LDS により 5% 水準で有意差が認められたものを表している。( ) は標準偏差を表す。

\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

**Table 7** 父親の養育態度タイプ別生き方得点とその下位尺度の平均値 (SD)

	情愛と過保護	情愛と自律承認	冷淡と干渉	無関心	F 値
生き方得点	97.97 <sup>a</sup> (11.63)	101.36 <sup>a</sup> (12.11)	92.69 <sup>b</sup> (14.48)	97.30 (12.53)	7.27***
能動的実践的態度	24.90 <sup>a</sup> (3.96)	25.83 <sup>a</sup> (4.66)	22.92 <sup>b</sup> (5.17)	24.79 <sup>a</sup> (4.34)	6.35***
自己の創造・開発	23.85 (4.58)	24.88 <sup>a</sup> (4.60)	22.39 <sup>b</sup> (5.69)	22.51 <sup>b</sup> (4.45)	4.85**
自他共存	19.44 <sup>a</sup> (2.80)	20.08 <sup>a</sup> (2.71)	18.23 <sup>b</sup> (3.10)	19.58 <sup>a</sup> (2.94)	6.76***

注：a-b の差は LDS により 5% 水準で有意差が認められたものを表している。( ) は標準偏差を表す。  
\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

のPBIタイプの効果も有意であった (Table 6, Table 7 参照)。養育態度の2軸でみると、母親では過保護軸で高群の方が生き方志向の平均値は低かった。一方、父親では過保護軸で高群でも愛情軸で低群の場合のみ特に平均値が低かった。

## 5. 自尊感情と生き方志向の関連

自尊感情と生き方志向と下位尺度の関連をみるために、相関分析を行った結果、自尊感情は、生き方得点と全ての下位尺度とに関連があった (Table 8 参照)。特に生き方得点と下位尺度の自己の創造・開発との間に強い

Table 8 自尊感情と生き方の相関係数

	自尊感情
生き方得点	.447***
能動的実践的態度	.367***
自己の創造・開発	.432***
自他共存	.340***
	*** $p < .001$

関連が示された。

#### IV. 考 察

本研究では、子ども時代の両親の養育態度が現在の親子関係や自尊感情、生き方志向に影響を与えているだろうという仮説をたて、大学生を対象に調査した。その結果、仮説は全て支持された。得られた結果について考察を加えていきたい。

まず、子どもの頃の親の養育態度と現在の親子関係の関連については、両親ともに子どもの頃の養育態度が「情愛と過保護」「情愛と自律承認」タイプと「冷淡と干渉」「無関心」タイプの間に現在の親子関係の差異がみられた。また、この結果は、過保護・過干渉の軸は関係なく、愛情・共感の軸だけが現在の親子関係に関連していることを示している。現在の親子関係の良好さには、子どもの頃の過剰な接触や自律承認などの過保護の程度よりも、暖かさや共感、親密さなどの愛情の程度の方がより重要であり、子どもの頃に過保護であったと感じていることは、現在の親子関係にはあまり影響されないとと思われる。

次に子どもの頃の親の養育態度と自尊感情の関連については、両親ともに「情愛と自律承認」タイプと「冷淡と干渉」タイプとの間に差がみられた。この結果は、自尊感情には愛情・共感軸と過保護・過干渉軸のどちらも関連しているということである。つまり、上述の親子関係とちがひ、高い自尊感情を育てるためには、愛情や共感だけでなく、過保護にならず自律を促進する養育態度が重要であることを示している。これは、柴山・新井(2004)の研究結果と一致するものであった。

また、子どもの頃の親の養育態度と生き方志向の関連では、生き方志向を総合的にみると、母親と父親どちらの養育態度でも「情愛と自律承認」タイプと「冷淡と干渉」タイプの間に差がみられたことから、自尊感情と同様に、大学生の生き方志向にも愛情・共感軸と過保護・過干渉軸のどちらも関連しているということである。過保護・過干渉軸に焦点を当てて見ると、母親の養育態度では過保護軸において高群の方が平均値は有意に低かった。父親の養育態度においても、有意差は出なかったが、同様であった。このことから、特に子どもに対して過保護になりやすい親においては、過保護が積極的な生き方志向を持つことにネガティブな影響を与える可能性

を示唆している。また生き方志向の中でも、特に自己の創造・開発において、過保護軸の高群と低群間に有意差がみられたという結果からも、母親に同じくらい愛情を多くもらっていた大学生でも、過保護でなかった方が自己の成長や可能性を積極的に開発していく姿勢を持ち、自己に対して柔軟性を持つことができていると考えられる。やはり母親に保護されすぎていたよりも、ある程度自律を承認してもらっていた方が、自己に対して主体的に成長する姿勢を持つことができるといえる。戸田(2006)の研究で母親の過保護の態度が、子どもの仲間関係における適度な自己主張にネガティブの影響を与えるという結果が出ていることから、保護されすぎていると受身的になると考えられる。しかし、千葉ら(2008)は、成長に応じて子どもを導きながら放任の度合を考慮してかかわることが重要であると述べており、発達段階に応じて保護の度合を考慮する必要性を示唆している。本研究では、親の養育態度に関しては子ども時代(16歳まで)というひとくくりで聞いているため、被調査者それぞれがどの発達段階での親の養育行動について回答しているかは明確ではない。今後は、子ども時代をより詳細に分け、どの時期までならば過保護な養育態度は生き方志向にネガティブな影響を与えないのか等を検討する必要があるだろう。

自尊感情と生き方志向の関連では、全ての下位尺度との間に正の相関がみられたことから、自尊感情を高く持っている大学生ほど、生き方も主体的でポジティブであることがわかった。生き方志向の中でも、自己の創造・開発との間に最も高い正の相関が認められた。これは相関関係であるため双方向の影響が考えられる。つまり、自己を価値あるものとして受け入れられていることは、さらに自分自身の成長や可能性を追求する積極的な姿勢につながると思われる。反対に、自己の成長に積極的な姿勢を持っていないことが、自己を価値あるものとして評価し受容することにつながると思われる。

以上から、子ども時代の両親の養育態度は、現在の親子関係や自尊感情、生き方志向に関連があることが明らかにされた。生き方志向や自尊感情では、親から愛情や共感を得たこと、自律を承認されたこと(過保護でないこと)が関連することがわかり、特に母親が過保護でなかった方がプラスに影響することが示された。一方で、現在の良い親子関係を築くには、愛情や共感を得たことはプラスに影響していたが、過剰な接触や干渉などの過保護はあまり関係ないことがわかった。大学生が親との良好な関係をもつことは重要なことであるが、それ以上に主体的でポジティブな生き方や高い自尊感情を持つことは重要なことであると考えられるので、子ども時代の親の過保護な養育態度について、より詳細に研究する必要があると思われる。特に母親はどの発達段階でうまく子

離れをしていかなければいけないかを検討することが今後の課題である。本研究で測定された親の養育態度はあくまでも大学生の認知する養育態度であるので、今後は、親の報告による養育態度との関連を検討することも課題である。また、過保護の尺度についても、本研究で使用したものは“私が好んでしたいと思うことをさせてくれた（逆転項目）”や“私のすることはすべてコントロールしようとした”等、過保護よりも過干渉という概念が強いため、今後はもっと過保護に焦点をあてた尺度の開発が必要である。

#### 引用文献

- 千葉陽子・我部山キヨ子・菅佐和子・金岡緑（2008）. 親の養育態度に対する子どもの認知と子どもの家族間の情緒的安定や生き方志向との関連：大学生への調査を通して. *母性衛生*, 49(2), 366-373.
- 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽（1992）. セルフ・エスティームの心理学. 京都：ナカニシヤ出版.
- 原田博子（2008）. 母親の養育態度に関する研究Ⅰ－育てられ方との関連－. *筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要*, 3, 271-283.
- 肥後橋敬子（2005）. 母親の養育態度が子どもの社会的スキルに及ぼす影響. *和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要*, 15, 197-206.
- 板津裕己（1992）. 生き方の研究－尺度構成と自己態度との関わりについて. *カウンセリング研究*, 25, 85-93.
- 小林真（1997）. 母親のしつけスタイルと幼児の社会的行動との関連. *上田女子短期大学紀要*, 20, 69-77.
- 小川雅美（1991）. PBI (Parental Bonding Instrument) 日本版の信頼性, 妥当性に関する研究. *精神科治療学*, 6, 1193-1201.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton Univ. Press.
- 柴山直・新井真由美（2004）. 青年期における性役割観と自尊心との関連－両親の養育態度への認識内容からの検討－. *新潟大学教育人間科学部紀要*, 7(1), 15-27.
- 鈴木祐子・刀根洋子・木村恭子・及川裕子（2002）. 男女別による子ども虐待の認識と世代間伝達の関連－ビネット調査とPBI測定から－. *日本赤十字武蔵野短期大学紀要*, 15, 25-30.
- Takahashi, K. (1990). Affective relationships and lifelong development. In P. B. Boltes, D. L. Featherman, & R. M. Lerner (Eds.), *Life-span development and behavior*, Vol.10. (pp.1-27). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Takahashi, K. & Sakamoto, A. (2000). Assessing social relationships in adolescents and adults: Constructing and validating the Affective Relationships Scale. *International Journal of Behavioral Development*, 24, 451-463.
- 高井範子（1999）. 対人関係性の視点による生き方態度の発達の研究. *教育心理学研究*, 47, 317-327.
- 戸田須恵子（2006）. 母親の養育態度と幼児の自己制御機能及び社会的行動との関係について. *釧路論集：北海道教育大学釧路校研究紀要*, 38, 59-69.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子（1982）. 認知された自己の諸側面の構造. *教育心理学研究*, 30, 64-68.